



学会活動は何のため?

●
岡田哲男 Tetsuo OKADA

東京工業大学理学院 教授・日本分析化学会 前会長



日本学術会議協力学術研究団体に指定されている化学に関係する学会は、100以上あるそうである。この中には日本化学会のような大規模学会から、会員数が数百人以下の小規模のものまで種々の学会が含まれている。このほかにも、研究会や討論会を開催している少人数の集まりはさらにたくさんある。読者の多くの方は、日本化学会以外にも複数の学会等に所属していて、少なからぬ方がその組織運営に携わっていると推察する。

日本化学会の歴史を見ると、わずか20数名の東京大学の関係者により発足し、その後基礎と応用間の確執やそれらの融合を経て現在の化学会が形成されてきたことがわかる。学問としての化学を日本に定着させようとした当時の熱い雰囲気が推測できる。私が以前会長を務めた日本分析化学会も、学界や社会からの強い要請に応じて関係者が集まり、活動を始めたことが学会史に残されている。このように、どの学会も発足時には関係者の学術振興への情熱と期待に満ち溢れていたことがわかる。

今、会員各位は何のために学会活動をしているのだろうか。学術振興、もう少しブレイクダウンすると学術情報の交換や成果発表、研究・教育への問題意識を共有できる仲間との交流などが共通の目的であろう。研究費の獲得や受賞を期待して学会活動に積極的に関わる方もいるであろうし、国や社会に対してものを言う、圧力団体としての存在意義に期待することもあるであろう。これら種々の期待感の一方で、学会の存在が負担にはなっていないだろうか。スケジュールが許す限りたくさんの年会や討論会などに学生を派遣し、自らも参加し、招待されれば普段出席しない学会にも出かけ、さらに国際会議にも出席する。確かに参加者と旧交を温め、知己を作り、情報交換することで新たなアイデアが生まれる。また、海外や地方に出張し、仲間と話すことで気分一新、普段の雑務からも解放され、新しい研究構想が生まれることも少なくない。それは良い。しかし、このような機会が多すぎないか? 年会や討論会、国際会議などの運営を任せられるとどうだろうか。学術振興のためとは言いつつ、赤字を出してはならない、学会のために黒字を出すべしという周囲からの圧力に晒される。学会の目的は何なのかが不明確になり、学会の運営に疲れてしまう人も少なからずいるはずである。

すべての活動には慣性が働く。一度始めるとやめられない。止まらない。学会活動も同様である。盛り上がりを欠いて、旬でなくなってもなかなか学会はなくなる。むしろ新たなものが出沒する。当然、多くの方が学会の組織運営に駆り出され、掛け持ちする人も増えていく。法人格を持つ学会の理事になると、経営責任が生じ、学会を存続させることが目的化してしまう。仲間から、特に若い人から貴重な時間を奪ってしまう。一体何をしているのだろうか、と思うことは多々ある。

皆さん無理をしていませんか、一度原点に戻って、何のための学会だったのかを考えてみませんか。

© 2020 The Chemical Society of Japan